

(1) 基本的に

太陽経絡病証は、体の後ろ側に主な症状が出て、痛みが激しいことが特徴。

① 片寄った使い方と内側の症状が原因

体の片寄った使い方が原因のことが多いが、体の内側の症状が関係することもある。

肩凝りなどは、腕や目の片寄った使い方が原因のことが多いが、カゼや虫歯など上半身に関係した病、食べ過ぎ、瘀血証、欲求不満なども関係する。

右利きで左肩凝りの場合には、心臓の関係もある。不整脈があったり、子供の頃に弁膜症だったり。普通の肩凝りでは、肩甲骨間部上半分が凝るのに対し、肩甲骨下角の辺り(心兪～膈兪)の方の凝りが目立つので区別できる。また、左前腕の少陰経の手首の近く(陰げき)にツボが出ている。

腰痛も、体の片寄った使い方が原因のことが多いが、瘀血証などによる腹の痙りや下半身の外傷が原因のことも多い。

② 古くなると特定の所に辛さが集中

古くなると、上半身では、肩関節の肩峰の周りの肩峰から3cm程の窪みが辛さを感じる人が多い。が、その原因のツボは、その裏側の脇の下から上腕陰経に出る。

下半身では、膝皿の周りの窪みに辛さが集中する。腰痛の人が座骨神経痛になり、歳とって膝の痛みを訴えるというのが典型例。足首捻挫をした人の膝痛も多い。原因となるツボは、膝裏～脹脛に出る。

体の裏側の痛みは自覚しにくく、表側の痛みとして感じることに由来する。患者さんの言う肩峰や膝皿の周りだけの治療では、余り改善しない。

③ 動かないでも痛い方が重い

一般的に、動く痛みものよりも、動かなくても痛いものの方が重く、治療も長くかかる。腹の邪毒などが関係するので、減らしていく。

④ 痙りに邪が入るとピリピリピリピ

ただ痙りがあるだけでは、痛まないこともある。腹の邪毒からの邪が行くと、ピリピリピリピと痛み出すことが多い。慢性期の型などで養生し、腹の状態を良くしただけで、肩凝りや腰痛が改善するのは、腹の邪毒に由来する邪気が減るため。

(2) ツボの出やすい所

① 患部、患部と経絡的に関係する所

経絡的に関係する所は、患部が上半身、特に肩甲骨鎖骨から上なら、手甲小指側、腕小指側～患部。患部が下半身なら、足甲小指側、下腿大腿の小指側～患部。

可動域制限や動作時痛は、筋肉が伸びようとしている所にツボ。

詳しくは、運動器系応急処置や運動器系慢性期を参照。

② 腹など患部以外

カゼ、便秘、食べ過ぎ、瘀血などが原因のこともある。カゼは、古典にも出ている。

「太陽之為病、脈浮、頭項強痛而惡寒」

(項(うなじ)も痛む>>>痙りが出る)

「太陽病、項背強几几、無汗、惡風、葛根湯主之」(項から背中にかけて、とても強張る)「几几」とは、鳥が飛ばうとして羽ばたく時に、翼を限界まで後ろに引いた時の姿勢を表すとのこと。項から背上部が凝ると、そういう姿勢がラクになりますね。

それらと経絡的に関連する場所にも出る。

再発が多いようなら、腹診を丁寧に、体全体の歪み、古いツボの出やすい所も診る。古いツボの出やすい所は、腹では12か所、左右章門、左右上下肓兪、五枢～維道、横腹4か所など。背では、胸椎7-11華佗経、痞根、腰徹腹など。足では、足徹腹、脹脛の6か所、下委陽、飛揚～外丘、承筋、承山、下陰谷、築賓など。古い打撲などや手術痕なども関係する。

(3) 手順

慢性期の基本の型で、患部や関連する所を丁寧に四診し刺鍼。

鍼のみで変わりにくい所が出てきたら、灸や灸頭鍼を中心に治療。

要点

① 太陽経の病は、後ろの病で、痛みが激しい

② 右利きで左肩凝りは、心臓の負担の可能性

③ 辛さ、上半身は肩峰へ、下半身は膝皿へ